

●変貌する馬込

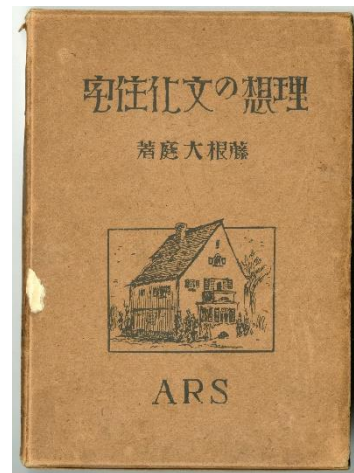
江戸時代、起伏のある地形に田畑が広がっていた馬込村は、明治・大正時代になっても農村の景観を保ったままでした。大正 15(1926)年に馬込へ移住した萩原朔太郎は「馬込村といふ所は、実に自然の明るい所だ。私は東京の郊外に、こんな明るい世界があるとは思はなかつた」(「移住日記」1927年)と述べています。

こうした環境も時代の流れとともに市街地化が広がっていきます。文士や画家の多くが居住していた現在の南馬込や山王の一部の地域では、関東大震災の前より耕地整理組合が設立され宅地造成が進みました。さらに、大森駅の電車本数の増加、大正 12年の目黒蒲田電気鉄道や昭和3(1928)年の池上電気鉄道の全通により交通網が整備されます。宅地造成や交通網の発展、さらには関東大震災後の郊外地への移住を促す気運の高まりもあって、馬込村の人口は大正 10年から昭和6年までの間に約8倍にまで増加しました。

馬込の風景の変化は、文学作品の中にも反映されます。和洋折衷住宅の「文化住宅」、「新道路」、「工事」などのフレーズが散りばめられ、農村風景のみならず都市的景観も表現されていくのです。昭和 3年に町制が施行され同 7年に東京市へ編入されるなかで市街地化は進みますが、馬込の特徴である起伏の大きい地形は残され今日に至ります。文士たちは変貌を遂げる馬込の風景に困惑を覚えつつも、その風景の変化を冷静に作品に書き留めたのです。



昭和 10 年代の馬込風景
写真には、住宅が立ち並ぶ他、麦畑や雑木林が広がっていた様子が写し込まれています。



藤根大庭著『理想の文化住宅』大正 12(1923)年
大正時代に広がりを見せた住宅改良運動を背景として出版された住宅(持ち家)の設計に関する啓蒙書です。アルス(ARS)は北原白秋によって大正 4年に設立された出版社。